

虎
香
經
虎

虎
香
經

虎
香
經

13
1963
5





佛告阿難誦經男侶宗門者死
 而墮獄中又優婆塞戒經
 曰男侶をにくむを女をなぐ
 地獄に落居るやけきなり地獄に
 八大地獄の介小ありあり。吾眞氣
 寺由べくも何くば。おれら一と地獄を
 實より空海の所とくも地獄に岸を

1963
5

ぐらゐ。梅ヤシラを枝タコの影カゲを至シ里リ不フ老ロの如ニ
ひどりのおりまき。子シテ七十ニウ有ユ余カ歳サシ
可キ幸キ英エイ氣キさうん。お小コ尺シツ八ハチをシおけも
救クり竹タケをシさうシ法ホウをシなシんシあシらシ。
日ヒりリふフびビ氷ヒヤウをシ消シユふフ子シ向キョウかカママ牙ガ
新シン糸シをシ讀ドク誦ジュしシ高カウ他タ念ネンあアくク。一イツ子シと
蒙モウ以イしシ。てテ山サン屋ウチいイくク不フ立リツ文モンやヤまマと

総トウ終シュウふ。予ヨはハ徳トク城シヤウ志シふフるル自ジあり。
昔シヤクもモ因イン月ゲツ偈キヤウ宗シュウ門モンのノ巻マキうウとトきキるル是シ
とトふフしシ柏ハク子シをシひヒやヤうウんンおオとト柏ハク子シ
志シをシくク。あア子シ日ニチかカらラ風フウ名ナのノうウち
予ヨはハ三サン日ニチ之シ兼ケンこコらラ高カウひヒたタうウ予ヨ
けケをシ説トキふフめメ一イツ子シ。其シ旨シム哉カ
蒙モウ一イツ子シ紙シ小コ字ジ一イツ生シヨウ息ウチ小コ

投ドて自他平等小法味を
さとし。あつらひりおれりあれん
中を 終ふ

男侶宗門の行者

男侶宗門の経

鐘西翁著

古人後庭等と称し、ニハ居け男侶のほてまはぢを
撰せんし居の名や、素まゑ元もとなる二品あり、劇場童
か事子のきくひの治部と、居まのを才一と
地あゑを才二俊と、其治部のおいさちを尼乃
にハ才一をめて三治の辨まに、そのつせに、ああ
あまぶ居にああされて、ああを、ああ又、ああ

三
葉の親い遊去用れ大さうへ志だうくもあらん
させむを燈とひいてふ己かのやうなあはは
しておまらちりまのいづらひもあたらうつとあは
あ記の赤い入りの仇ついで舞臺の格を足踏ひ
さかすあうち衣巻と切り返り舞臺へ押出
お意ふ太夫のかろ役セリフをまづみおてあ、
扱へアイルといふをへ入おのせりふすてせむ居

をまうあさうな教をつとめておほしき山法師
あうひは在の執事坊もあ合ひいぢぢぢぢぢぢぢ
あふあよるへ本のうちのとらさなきハもあはあ
へのいきぢつづき中ひまるとあまこと此情を
こあうりけひひるハ女もおよるぬやど仕立て
絶あ保り又たがひは是別叙のむうー
あらく仙人のあまをあり新を撫水を波とあ

の夜をうとめぬひしうも 彷彿は 難行苦行と
得る所不なればはもろくハ治癒ハ
是大紫の元乃也又地のあふるのうちも宿舎
寺小世とく原ハいまぢも 狭ひとあひ寄らぬ
ものありて分二の元乃也 さもちかくて何の
情もかきこいなき小丁宛のたぢひを 狭づくで
まじりふたよものありきハ只其絶まきを

ぬむもあやしえんをとおもす家よあづまこの
ともかくよハ 狭小前髪うづきさせてあんがう
ても一穴うあは 海是すつきるや古街に
山樹岩 是弟 梅 是兄との原ハ山谷の
俗也これたの兄弟のりまあらぢ 山樹岩ハ
七里番といひて今の 沉丁花ハあまよ
色香ふりき花なり 是を梅小あづまてかの

水戸やとる元の情のうらみきにをとりたり
古今類磨も和も元乃ををす得人多し
周の棟玉の榮意を八枝をこゝろが意外トぞ
あつて清令取け家しあも元ハおにひひ切
か行美もあつてをすまきおめはッイ志うらも
すむるをかくせられハよめど経年共親寺
今お皮のとれぬやあほし又衛の靈公赤子班

どし原も元を清がておれしがなれりみん家の
弥子班が親の老磁研は極にあてられんとの
知つたおとりまことごり何に靈公の車子家
親の取行もをを靈公守て存んめりといひて
とがめぞ又弥子班あ原目もををてあはり
風味がよふ一口喰ひて原を靈公ハさかし
そ今人せとすめり公あもてて曰おれを

たのせつたんは二をけけうまき地をこてつと
收ひ二なせうく思ふおて海らぬーに
びーかたせハもあしはふひもよらむど
婆のうらみやうふをうら法の事とけりおて
車のるももけるも不在ゑ外子方う天八幡
かんめんあゝまど大おふけさるんてなんなく
びーうを道おふらうたのーいひちぢ

たのんごつそかうしてさむさうとくむぢらと
いふうらぶらぶらものころん志うち也你多飛も
おさあぶののあはばごをくしてあんの役らも
きうまけれどかあしぐも香具店でも出して
やうれおはままぬふを靈公一生の仕ぐどり後世
たいん持の口のなぐうなる也日の廿又ハる尾の
文受法師さもあさ海も流に荒行を

おとしへのりあせて六代市おとらふるを
入ささゆぐと世話をやれり又論語先進
之篇に曰暮春者春服既成冠者
五六人童子六七人浴乎沂風和舞
雩詠而归とありは孝子とさし居
るものゝをんぞやいふぞやつひがあはるとして丁巳と
おん老人つれてゆく等もかし又とらふ子の

天神来す存やうに門者の子たをつれて
あろくやうなるハ唐ハもやうぬそそ新は元
にお違ふまは徳也汝生のく室をらよく
をれてあはつれては理おひくよむ想向せ
たて
たれり孔子聖人さかかくのごとく
たのしき事なるあははいんや凡人おきて
持やねおらうささけをうごふとらふも其

彩色のすにあらむ 紫ハ行綴りて 妓之
紫ハ今ハ不神良帽 子ハ女師 治師に
まれば先主女師 己ガ女師をあらうて
還テてまゝの氣 いらむり多 襟つくりひ
て 尻眼がよいし ごとくも 切にまゝひて 尻足
糸の 紫ハふらむり 爲ん 我ハ 國者 紙衣和堂
編笠居士と 妓昌福の 同言あり 編笠居士の 白
あまのまき

秋とかよるまゝも 女師を 女は おさむ 海のの せまひ
んといと 百んぞ かし 又よむ ぞ 女も 存中 せま
また くれまゝ ぬり あり び ワイヤイ せま ぐ ちやり
ごか にかさ せま じに の せま 女 師の 妙ハ 一 巻
中 習上り せま ぬり あり び せま ぬり せま ぬり せま
三ふ せま ぬり せま ぬり せま ぬり せま ぬり せま ぬり
り 同日の 論ハ あり ぬり せま ぬり せま ぬり せま ぬり

がお来ていぬおをさあいの甘癖のあいらひ
 と見かたをせうちで八はあのおぬわと^{あが}親で
 居多うどうれひのをや断斗からつてやうち
 ぼりめい^まと居るふもや^ましと^まれ^まるあ
 這^ま者のやぶ入が親方の内いぬ^まやうな
 教つさうておにんをのこ^ませて^ま衆^まの
 先^ま、性^ま根^ま魂^まをつ海^まに^ま上げ^まる^まや^まであ^まぬ

一床の内もむい^まむい^まと^まを^ま足^ませ^まあ^まに
 ち^まら^まい^まひ^まお^まが^まあ^まい^まと^まが^まる^まの^まあ^まい^ま中^ま居
 ま^まを^ま教^まら^まつ^まて^まら^まう^まて^まあ^まいて^ま　こ^まい^まー^まが
 か^まさん^まが^まク^まー^まく^まき^まあ^まい^まが^まる^まし^まよ^まう^まて^まは^まあ^まい^ま
 ぼ^まハ^まさん^まと^まし^まよ^まあ^まあ^まが^まぬ^まん^まん^まを^ま、^ま香^ま七^まに^また^ま
 三^ま盃^まり^まど^まうれ^まま^まあ^まつ^まて^まけ^まれ^まど^まかん^まど^まう^まま^ま
 し^まぬ^ま冬^まで^まこ^まい^まげ^まぬ^まふ^まう^まて^まこ^まの^ま内^まの

男をやおるがえふはけりて仕まつて
あつてもあるものよてをいふはうらふ人の
價神代をとりておるが別うんばらむしつて海うらふ男こゝろ偶も
はあつてのあつていふあつていふあつて
あつてはうらふはけりてはけりていふあつて
ふあつていふあつていふあつていふあつて
いはアイといふてそれよりいふすうて

念かし 遊あそ戯び 織田信長云の少はふもり
おらんとて山性あり 信長云 厠かひやへまひり染
つけおらん 沓くわ刀やいばを持てひる 沓くわ刀やいばの
まきまきおの敷とけりていふあつていふあつて
公一則の意いよりうらふひんて 沓くわ刀やいばの
まきあつていふあつていふあつていふあつて
いふあつていふあつていふあつていふあつて

也 少性方をひくは長教をいれたおらえひより
何れもさう言ひ公の言はんが何ぞて何を出ま
やと問ひぬはさのふ一割一仰あの時以乃
もちくさるにやとやのまがむの教なくと
よとおきてよくぬるは中よまふとこく
けりしに信長もかんじくせぬしとや
けきどひのみ言ふおえの情にうてましく

すあちなる家あるをまきさうれのおくも
あつたはのあちをたすさすこし踏ぬきて
う勝てり家をあさううちをせてやつ事
そウの如く家をさうりおとせばいあんを
りつて申して又勝つ家はあつたのり
あちをきてさう家の勢とすくさいあや
心美救のきさうとたえさうとあはぬの

るゆゑにそらゆゑ

つれあるひともいかにあし

紋目を塗りこむべき

多量粉のこして床をひらるる所

いやく思ふ時床のゆさをすめど

甲は居ふらうやうにせむ

たやさをあしせむ

床の底にこむるをせむ

床をばすやうにせむ

床の底にこむるをせむ

床の底にこむるをせむ

先ちるにこむると共益あはるるはゆり云

益にこむるはゆり云又あはるる

実なるもの、母をばやせん、あつてひるであらふ

すゑに 階敷を切て 林會下 小休くせしむ
編み立居士 席をきりひて 置れば 是は 吾州
御志 然るに 是を 居合 綱に かりて 入て 日
ゆゑ 氣の下へ あせを 流して ちりり といふ 湯が 答
ふりしが やく 其席の こと なる 八月 花 餘情に
あつし 女席の こと 色ハ 卦み つけ 入り 糸の
箱を ちりめ せつて 足居の うめん かり たり なが ちりく

とら 居もの ぞ つかし こそ ぬ 多く し 二女 を 一りの
おん 村 巻 巻の ひこく たり 思ひ つけ して
ことの せう なる きり され あり たり あり たり 答
す 居 道の こと けり ぬ け 教 子 國 小 せ ぬ 出 して
女 席を にくむ 八 たり なる こと なる 外の 界 あり たり
邪を 居 裏 道 心 を きて 指 子 本 下 を なる あり
やう なる たり なる こと なる 八 摺 あり たり たり

石垣をせし海解航にも寄りしりるも其良のたに
よりつぎ却て新造とて久未開紅の花に
くくつていほぶひりけがほれなわのつがも其趣香
海まをきりて水揚とて新美堅し
共まづりてかまひほかたんでハ常もあらし
終末もあらぬつあにりよれぬをちして喜びを
わらふをを俗に文殊といふ高あつがかり

大八洲の秋津國ひとりあしをほたのし
男侶乃の乃あふたわらぬ今男侶小す
の蓋あふるをよ新しゆく一よ小者人衆を
さすて國一し男侶はつれあふひもあし
よは是ハ油のいんき海さふうりて之其由ハ其良を
つれあふし何このあそ兵男ガ句をりけ
おまほさぬすほが小ぢうのふり也也是

概姓（おとこ）のちのちもどや又後日（あとのひ）を夢（ゆめ）くしごと
きつうれいひをふらぐふも（ま）静（しず）かゆくおころ
るどやいふ多（おほ）粉（こな）のまぬる紙（かみ）まついぢあへんよやう
け多（おほ）糸（いと）粉（こな）ハ毛（け）る夕（ゆふ）の責（せ）た（た）ぞうろあければ時辰
も姑（おば）之（これ）代（しろ）ハ改（か）付（へ）たたことあておきなりの
巻（ま）をもちながりさるし（し）の橋（はし）とありて（あり）妹（あ）物（もの）も
よやくいふも用（もち）なるとすめぬの六（む）白（しろ）の

猪（ぶ）まぐくとふものでにくむとさるし
しむらゝのまをいふもいふしあぬのハよすが
おのあらしむらゝるふ中（ちゆう）居（い）のふそにざり
又兼（また）文（ぶん）ヶ（が）おちぶらて後（あ）世（よ）のしゆけておて
隣（となり）のま岸（がし）風（かぜ）ハ口（くち）の遠（とほ）ひふをうけてあつ
よありとこんごう一（ひと）の巻（ま）ふくまらうをせむと
婿（むこ）一（ひと）が家（いへ）もあつていんまはまゝいふ出（い）であ

よそ夢切てらふ我まのよとふ文韻律
なうん信すきうが持ははむやうふ縁づけ
しそまくとらうりさるん冷屋すこた
寄よとふあやも氣^き跡^{あと}—あまふにねいの
勢^{たけ}解^{かい}がやすきや中^{ちゆう}路^ろがあらりまぬはの
まて^{まて} 船^{ふね}の口^{くち}く^くあれハ切らぬに九^くふい
曲^{まが}も海^{うみ}のまやうにありえんで清^{きよ}ふの

あはりおまこものやあにぞい海^{うみ}の底^{そこ}あ
うはまきふまゝ人^{ひと}むといふ秘^ひ録^{ろく}も大きき
るま遠^{とほ}のひや女^に師^しの海^{うみ}まき^{まき}は^は只^{ただ}其^{その}あに
うちまを海^{うみ}ふま^ま—あにあまのち^ちは
むすが情^{なさけ}のありま^ませ^せい^いな^なの^のま
ち^ちの^のハ^ハち^ちの^のあ^あ—[—]か^かの^のあ^あや^やが^がま^まの^のあ^あ
は^はあ^あお^おく^くに^に五^ご痔^ぢや三^{さん}痔^ぢの^のま^まの^のあ^あ

けするハ茶湯へまのりたまきこふこころのこを
いふはのり備ふおのりもあんなきお抱へ
まごく是氷と備ふはまごりあ
先ぬがもま存ふの歌備ハづれのおより
せぬきほやけをさえと紙衣和尚眼を
いらしてやうあはばあひもよるぬけ一白の
理窟にあらぬてけ時の同答ハ備望居士の

舞をまを男備乃ぬまのうぬをうけ多師
宗門の務とせりこり 題 居士の二日碑を
せられてまなやまれ一時の同答を係
あつらひもあらぬ真とあり男備宗門の
ひけとせりこり 釋道信らのともごころハ
けのちとてもま備あはつるこ佛きまご
るも行者行者こまはあせりこちらごころの

あり元好と見家小枝とあやむるおぢいとむ
 世ふあまの元ふかりりちちるふ道のたきとほを
 もてあそびて思ふほもいやくかららふくわを
 すほたけしるもはこけくく角秋の困くんきあが
 ぬきでござりやまくと扇をちくと唱へさされ
 浪花六月廿五日の川かみにと枝ともちのさだ舟に
 のりて樂たぐと籜たぐ我われし物もの清きよりしと時ときときぬ

たさげとつらきものへあつ元ハお教ふにきびき
 あらふれあるのほとよりあどまなくとつあ時分
 世のさへあほ不ふは時々あへうつてらたとい
 十さ元れさへの子持たあつてもきしこの
 うせぬものく又さう元の園かやのさへお席のゆく
 けあまものまあまがきとくはたあまあは
 むつあまのさへさしけではあまよあまのさへ

足おすはるものたみまひトてをせんもこの
いさりおほものん只根こうさりにすきる
なく水車で粉こををこくやうおすはる
照あ智ち流りゅうといひてまじやむべきあは流りゅう
の人ハ浪花なげな衆人橋のの東溪とうせきをぬつても
心哉こころうごうまをものるまてこれハ大に
下くだ品のしん真まことの流りゅう乃なりをこのむまハあらむ

浪花なげな衆人橋の東城とうじょうに不ふ潔けつ物を賣う買かすはる哉
辨わとすは衆しゆありくは遠とほ奥おく氣きをうけし
あつ名の園う中のちゆう屋やハ女に師しふまどく係けいと
ちがひて激げき深しんをちひぎ只ただ激げき而のにて
表あきめみ深しんさるありけなハまじは術じゆつ
のくろきをまじしぬ作あとしし流りゅう生せいを導どう
はふ無む量りやうの言ごつさすはるまじ
あかきくとも不ふ知ちなる衆しゆ中ちゆうハ大だい火か

故道ひはつあつき中よりらんがせたり
とりよあ命を清かし あはれ 徳をたぬ
所みゆきありき像に足るふのとし
け道ふそくより入るはよくすまこ海
乃たわくまほはまみやく ちよちよあまが まま 枝葉の小紫哉
えあれてけ道にた悟ましと云く

男侶別名

よろえをヒガ

ヒガとよみ ヒガ 夫古の言にて男色のまじりこと
かりて ヒガ 僻ありといふ心にてヒガとこあふり
是は ヒガ 日本小目鼻のつらぬ時介のちを遠
り ヒガ せらることとし

中ごろあんな ヒガ かくとよみハ

元乃のまじりのあちを ヒガ ちめて ヒガ ちるるを
心中を ヒガ かくとよみを ヒガ ちりて ヒガ ちるるを
あやまり ヒガ ちるる

菊彦といふ家

川太師も及をぬりて少氏乃執人の人かの所を
け若ふきとて称羨せん

ベ
ス

けベスといふハ蠻語^{バンゴ}にて^{ハシ}のほう
いひかゝるや文字つまひのうらむけ乃執人の
の人再考あり

又ツッボ^{ツボ}の切はなごのきらひ坊つて
こたらりて論おほふき

奥、男倡宗門の名目をあつり

色子名寄

十木	市松	姉川	外山	嵐	お市
相野谷	嘉吉	萩野	子義	中村	石松
十木	系松	玉川	庄之	津川	菊太郎
山下	茂太郎	坂東	系松	花相	茂太郎
竹中	小吉	市山	源之	生嶋	金吾
小川	吉太郎	柏井	田作	山下	龜松

相野谷秀松 姊川新田部 嵐 糸糸松

岡東産店

中村松右門 大和川兼道 玉川大三郎

岩井八十七 嵐 卷之助 市山苑松

嵐 浅五郎 中村 又次 大和川 龜松

山下 三八 市川 圓七 浅尾 富五郎

中村 三吾 柳山 小太郎 子子ひろ治

嵐 龜鶴 嵐 虎市 嵐 五良市

坂東 弋三郎 中村 富三郎 浅尾 七郎吉

市川 万五郎 萩野 茂次 岩田 花崎

中村 いろは 市山 富松 松崎 小松

姊川 大次 中村 志け次 萩野 小吉

後川 小吉 松崎 大吉 嵐 定五郎

富山 龜松 嵐 龜吉 嵐 玄次

市山浅之次 畠山兵太郎 畠山 金作
浅尾十治郎 玉川侍世松 花相豊松
姉川之次

中村屋之店

嵐 芝堂 十木富太郎 嵐 芳吉
樽山久太郎 村山金兵衛 嵐 小舟
竹崎久人吉 相聖谷久忠 萩野梅之次

相野谷茂の 市川金次 嵐 森之次
三保木市三郎 嵐 比多茂 嵐 八重菊
十木榮次 十木芳松 嵐 百太郎
おふやと吉 嵐 榮次 嵐 八重吉
中村小次三 十木金次 中山小吉
三保木竹之次 嵐 富之次 嵐 芳之次
市の川森太郎

堀江彩子

以乃夜 吉原市 糸糸 糸乃乃 花松

京糸 乙松 糸糸 浪糸 糸糸 糸糸

糸松

千年屋 長五郎 竹三郎 万太郎

册波屋 糸保太郎 常世

